

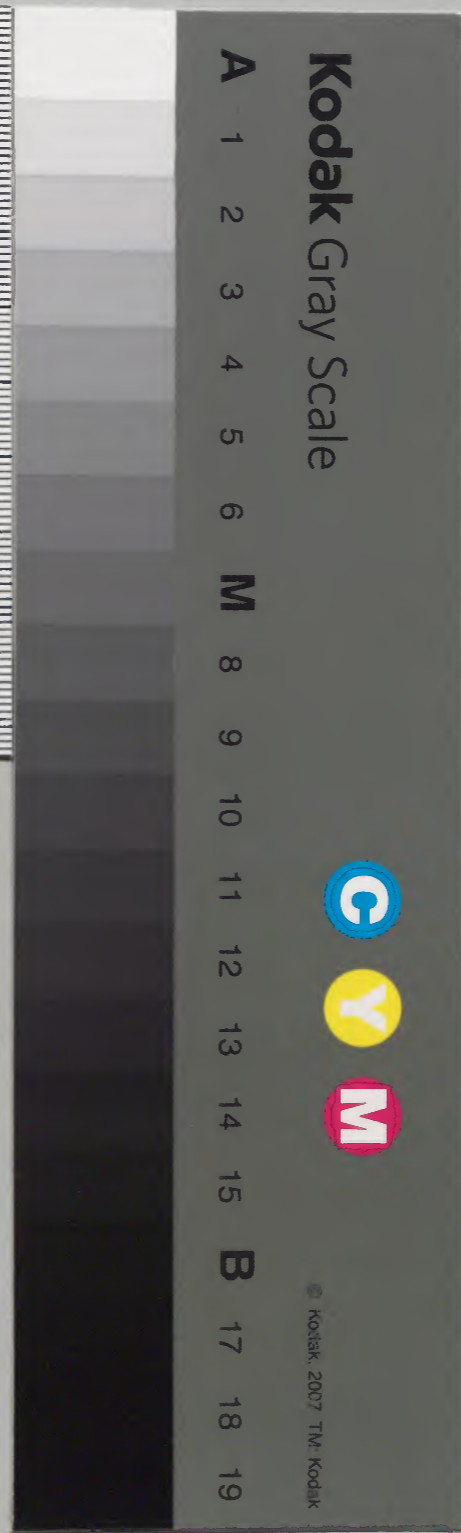
塩
七
九

四十

大 政 官 文 庫			
		一	和
		一	書
		一四	門
		九	
六	二	一	
五	二	一	
冊	函	冊	

内 閣 文 庫			
		一	和
		一	書
		一四	類
		九	
		一	
二	二	一	
二	二	一	
二	二	一	
架	冊	冊	

内 閣 文 庫	
番 號	和 11497
冊 數	65 (40)
函 號	211 302



教部省
文庫印

國書
印

南
庫
印

麗日燃々翠
柳住
一絲晴影上
窓綺
帷知景
物元
無意
蓋面梅花
恥髮辛

四十

丙一三七九〇號

あつた燈下に坐して獨りふさふさ

ふさふさの叫ぶ風も煙も炊入影は老をぬ春をけり

春はゆ人れはとつれはるき

年月ははるもさる春もはるまやうはる人れはる

念佛堂上人 侍舟 口吟せしとてし

上下鐘鳴登道場 扇声念佛待春光

浩々光天春色陽 東首化日照雲之壯
花風一信吹残雪 緑水三江意味長

默全法師 常念寺

春此如好

立の爲に空の如くも言ひて不言此春は来に幸
と聞へしもたも不顯れ妙多れ、予身既識へ
さるりと天真未發の中より、この心、朝も
形は、造化の跡もいらさぬ、ゆるゆる、こころは
上天の載といひ、中庸の篇終に於て

己年、彼田卷に莫見半隱乃意、おのち、
かゝる

人より物に立、此に、初て我篇とかく、

戊戌岡東 御連 祈神

後小永八年代に八度松の春

昌信

御 此とけき、庭より、霜の、

池の如く、氷も、今、

昌池

岩の、も、小田や、

其の

むしりくハ生立ぬるに去る京

信政

物あましれ乃いさそ一りき

昌長

月よの歌詠此やうれ此をいし

通章

夜よの歌の音いしくし

政章

大境ハまの中えぬ夕冷しく

仍氏

春よの歌の音いしくし

昌筑

鶯はふと鳴る本傳いし

昌頓

こち風やまの野にさうりり

祐重

京人此文に去冬武者小路家より玉をいしやして去源し
和歌

寄雅意

昔より此声も別をいしてハつゆもいしりり此多しけハ社あり
桜寺此上人とやいしりり

嘯鳥用花皆隨縁 東風不競柳情迂
家常唯有旧夜鉢 穩坐自今帶去年

と策しししとんれしはち和了

晴風柳下袿塵縁 古調吟新賞鳥迹

春去春來滿前翠 獨慙大馬繫餘年

此一月七日乙酉此日にて心なりし法し春此也火

かもししやてしゆり

葦原大師乃御忌に通曲六和上法音吟竟兩師乃

請して同法と共小誦經念佛て一か勢至田通乃香

光莊嚴此心と 經曰如海香人身有香氣之

たふそし法よゆり 梅はふちりす(と)香小句をい

信可

廿五日ハ養林精舎小諸徳取會して年とれとく引

声此念佛侍りて大師乃影前小香奉れりし

春水霞消流翠光 園梅玉綻發紅芳

滿林如喜瑞葦頂 猶見恩風遍八荒

亦六日正元此會小春山松しりゆり

信可

峯も尾よ花しりゆりてしを度ゆりる李此

平信

おのりし子年此ハ常盤成り松も春立影も長閑き

正之

ほよなく度此庭もほりゆきのハ雪此李此李々々

其外多し〜当座

名所眺を

春の〜雪を〜て〜

信行

正之

正之

中や〜

春水〜

景矩

た〜

景矩

夢〜

以正

河〜

京師梅月堂宜阿此春此秋

年〜

春〜

禅林上人 炬範

山里〜

如月〜

侍りし霧いさゝり立こめて同一漢と出帆か
ちりへとさざりし

新奥廣川浦の朝霧たち別きけは浪といつととふ

鈴鹿山とふ道にのみさきーが越ーつとを思ひ

いし侍り

京ふの檢しむしうふと鈴鹿山こまぬ春はふの下は

阿漕の浦

春さしよの漕の蟹し 船てはちり夜こし初るに

松坂ちり清光蓮社より前大僧正祐公十万人會入り

謀念佛をゆ置ましー貴となく 賦となく其教入

て今歳時月の知恩講まして九三十七万四千三百五

十人ともく我も亦此中かこせつすくうれゆるんと

いとたのしー會堂といしー巖堂に及つてええ

ー同法名留半座に芳契むをーかして印ー臺

あ侍りしやのこしりあ(わ)

こけて行花の半は春しう人契にしゆめ法はを

赤宮の田跡にせしけり神といふれと執りしとよ
るむしういひいれぬるふふりや東無人倚玉闌
千東風不管真亡事とすし

大蛇の浦
大蛇の浦にせしけり神といふれと執りしとよ
るむしういひいれぬるふふりや東無人倚玉闌

豊宮川
春の池に少くはまればはたかみみのこも大蛇の浦
大蛇の浦にせしけり神といふれと執りしとよ
るむしういひいれぬるふふりや東無人倚玉闌

みそたせしじしむらりしはたかみみのこも大蛇の浦
大蛇の浦にせしけり神といふれと執りしとよ
るむしういひいれぬるふふりや東無人倚玉闌

外宮ふまひり

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

大神宮

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

あつひれくみおぬる子蔵とれはまににこれか
代い

吉水大師 太神宮法樂此時
名号以文明十八年外宮兵火此時
我並まは光明遍照の所す
神廟の如く奉りて
神廟の如く奉りて
其後欣浄寺に
山宗の
御

頼ふ
神慮此御名残し
靈地の感情と
林

あ
神
院内の御會始此和歌として
後野井此二位家
記

享保三年正月十四日

竹樹有嘉色 法皇御製

時今桐も花さく園此竹乃千尋に
幸も後

式部卿家仁親王 京極

うらめいきてお代よりお産いし〜めて事〜
く〜おき沖池れ流〜ちをせれけせ〜
や〜し〜また〜ぬ情い〜れ〜上〜に〜り〜れ〜下〜に〜
〜き〜と〜ぞ〜れ〜し〜〜と〜お〜ひ〜奉〜〜ぬ〜法〜家〜れ〜清〜
ハ彼あり〜〜平減〜ぬ〜れ〜が〜安〜に〜〜り〜〜傳〜乃〜之

極樂教寺新涅槃様の大像を圖して間点のり其會場具

ま〜り〜し〜

千輪留光彩流輝 聖壽捨五分告啟

もほ〜も〜す〜し〜は〜お〜い〜れ 御心〜
〜し〜奉〜致〜せ〜れ〜人〜衆〜此 御盃の世々香深〜
もこの春は國々入らせ〜り〜し〜ゆ〜も 御〜と〜ふ
き〜な〜り〜も〜た〜り〜し〜〜し〜た〜に〜流〜り〜奉〜致〜さ〜か〜も〜い〜
い〜し〜め〜し〜ゆ〜〜
〜
はへ〜か〜
〜
よ〜は〜こ〜ん〜お〜び〜し〜〜あ〜ら〜れ〜す〜ゆ〜ど〜む〜し〜か〜う〜乃

御よりいせ乃或にいしく雲々立伸りしりもく
口々〜〜〜〜〜しむにしりもむ〜〜〜〜〜もるにをか
さゆ〜〜〜〜〜月〜〜〜〜〜にるん〜〜〜〜〜るまに
多〜〜〜〜〜ま〜〜〜〜〜此竹の頭の雪いと恥〜〜〜〜〜か
らぬ〜〜〜〜〜霞さりの多〜〜〜〜〜艶〜〜〜〜〜晴にめろ〜〜〜〜〜我
梅〜〜〜〜〜は〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜たる遠山は
〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜め〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜め〜〜〜〜〜

山娘の居た喜阿彌の〜〜〜〜〜に〜〜〜〜〜度代長春の来ぬ〜〜〜

春此業報〜〜〜〜〜き〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜慙塊〜〜〜〜〜何〜〜〜〜〜
其夜〜〜〜〜〜温所を調〜〜〜〜〜き〜〜〜〜〜何〜〜〜〜〜所〜〜〜〜〜不
〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜正者とも〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜入微〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜剛報〜〜〜〜〜志
〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜又〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜り〜〜〜〜〜寒夜倚頭と巡〜〜〜〜〜し無
縁〜〜〜〜〜此厚水と踏〜〜〜〜〜も〜〜〜〜〜更〜〜〜〜〜さ〜〜〜〜〜じ〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜く〜〜〜〜〜
君思〜〜〜〜〜此〜〜〜〜〜是〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜思〜〜〜〜〜い〜〜〜〜〜子〜〜〜〜〜竹〜〜〜〜〜
涼列朔風石雲昏 踉跄花子餘寒門
孤裘熊席並誰惠 自懼三冬猶獨温

時月元々此の如く君と并に奉り思盛と由
 まに幸花れはさくしにさくさくさくさく
 丁に此教にうらぬめまてもり御席月し
 してあてさふまに此の如く敬廟に仰しに武業
 の教にほふまに此教場と命代輕して馬前々
 死といふれはせん思ひ多れをくはれさく
 さくさくさくさく此の如く免に大にたはてあふ
 座ハ上下あててはくさくさくさくさくさくさく

月白金沙半春夜

双林似雪落花飛

二月廿三日東都にむむく孝寛子送行乃一絶とかく

新

先生去何之 武陵路悠々 春風無限意

千里村東流

傾に和す

孤舟千里月東海思悠々一望断雲恨音山亦碧流

柳花をさきにもはるす女れはに一年のこけ

涙もたれぬえの時鳥仲此今一紙訴とて
奈れは或人此れは 茶浅野のゆり
めりまはすしあてふふといひのうか
海邊幸乃席た
朝貞此作茶と今此は けり
とせりやうかうは花も白き此
題さくしうは行かうは中に

逢恋

ぬれうて涙もたれぬえの時鳥仲此今一紙訴とて

後朝

おとけふ此はすしのさびたひひんうへ

故郷より正之會此茶題とて

海子観 小自會

丁此はのきしはしし 時鳥仲此は

水辺螢 六月會

うのふのふ乃の深此光る池や螢此かゝりて人
端午口号

客窓雨過風新緑 菖蒲獨醒酒盞空

回首江頭無同處 士岑千里白雲中

江城下近年火災多つた 享保改元正月二年ノ正
月六月十二月三年四月五

月等

諸侯此館寺社市井此戸々数もあつた

焼付不且一同 所二三度も烟少なり 家多

り多しと云ふかゝりて此れいふに つゝ費用此い

と云ふは 竹の風自りて此れは 修りたりしと云

ふすゝは 昭々たる乃やうにおゐる 竹の凡そ半迄以東

小石川下谷淺草やうに 城東此町く南乃

方芝のりりして大なるをとなつて 此れもい

しゝゝゝ 都會いほゝ 變りて一村此れは 此れ

萃れ地の大なる多れは 常なりし 此の前の此乃

あすゝ 度新又造り かのりて 近年貴とて 賊と

り 賊而不足行り へに志は 此處此火々々

向くこ流帝にして今清人の

蒙る満州中と

待多し竹の

い電にくい

そのうへを

後めし

上ふき

かしら破履を

こす

鞆く此

中にして

清乃頻治

算唐人

皆こゆと

用い侍ふ乃



八月十日 宮中舞樂

朝廷乃示官有廟の神
會に参向也

水戸公 我君を先公詠と請一由して舞

樂神楽河十三日公此上使指葉下野守正冬

振鉾 三節 萬歳樂 延喜樂 迦陵頻

胡蝶 散手 貴徳 太平樂 倍臚 抜頭

還城樂 五常樂 白濱 陵王 納曾利

退出
長慶子

或人の心を惠まれば行はば謝しよ

此法いてに

青眼望中一徑通
豈圖袖裡領清風
晚蟬送夢
槐花下葉影似秋月玲瓏

東都小侍
星夕此書懷

窓外落葉一葉桐
雲晴銀漢
蕪秋空今宵天媛
風流會孤枕思多望碧穹

何漢靈橋就帝女
清容寬凝粧出珠殿
沐髮臨銀

盤已喜佳期至
又恨會合難
雲簾風飒々桂燦露團
々相思夢未成
離情愁更酸
曉天尚依々
顧望渡關干
又或人

正綱

夕月七ほの、みよて星合此天の海
物所傳々々
武者小路
家乃當座

何れもいし
院氏、梓鼻

禪ヶけしに放時乃事、腹中此書法、
自満のほしめく、
七月十日三村

美濃國唐見此松見尼在前住同寂此後林氏
如入院乃命、

此寺、如大禪師在著尼の旧路、
寺、

此、
き、

或僧すま、
慈寛

山峯の
甲斐の

只異香... 十七日茶昆

増上寺此無常所... 入奉教會津中將殿以下司

此所敬の大家多... 増上現在濱卷

大僧正 淨燒香

十九日所貴依用くに全所半玉色此吉利と化して

光曜日に映す... 念辰御庵室別時念佛

御志願乃所方... 直又常不退轉乃念佛所と成

...

同日増上寺御亦月行事以上集會 御墓ハか添して

縁此西山又築置... 影ハ大殿ニ安置して

任没子秋以書懐に和し

乱蟬漸白雨... 客意幾秋情

翠山領雲千里... 素風秋一声

鐘驚孤枕夢... 霧障双星明

露荻流綿淚... 鳴鴉逐月征

題卷大僧正殯此條或若男日... 結縁... 奉正し

さて自二一乃遍祿して後因寂しむひー菴室
よ老相くやたーと道境ふが大事加し馳身くあ
瑞相をゆも感涙を流し信心を増すー道俗共
百人といふしとさしはとく紫雲といひ異香といひ
老相といひも此くは瑞相と見聞すーと實ま
念佛の威徳ありしとく易位の正業あり
うさしにさしういさのこすしに可御可信鳴心

二七月 七月の夕又紫雲西よたるをきー 此見ゆり
女乃

紫雲の立子にゆきぬ別まー 兼て是の月
顕譽大僧正臨末地 瑞紫雲のこく 爾維地後通命
不坊遺身舍利乃 奇持末地世にい又類くやゆ
中も又其舍利存ゆゆ 三十七日 八日の忌辰波彦一介
て香をさししとる

紫雲の立子にゆきぬ別まー 兼て是の月
とゆしる秋夜踏の月とるゆりー又やんま
さしんむしーのさまの秋よるゆりー月教とる

竹のしるしをふりてあまの命のついでにこゝろ又東の
秋まらけのころもわらわめくハリナクハリナク
地をり道はゆる

かきつる内をふりてあまの命のついでにこゝろ又東の
はりのついでにあまの命のついでにこゝろ又東の
武蔵のついでにあまの命のついでにこゝろ又東の

月前は壇

捲簾秋気爽 松陰露清光 芦月一江白

萩風四境涼 吟哦投老昂 得失為誰忙

天淵東鴻鴈 何時棹葦航

十月夜雲かきつる ぬきつちりて年一とに一萩の
新もこすかりしちりて年一とに一萩の

毎雲れつれつて山に路にさりてあまの命のついでにこゝろ又東の

放生會此日市谷の八幡宮にきて奉り

右いづれの新をふりて山清水にうぬ代に澄る月として
右あまの命のついでにこゝろ又東の

ふらにふしはくも何一 後かういかにみむ
虫と

蘇州の地に暮らすはしる月あむさの秋あむしり
のきく

そなたくはく一者 瑞人 一園のこけいけいけの軒ふ

をわしてむむけゆるとして用列 蘭花又一年といふ古

詩を吟ふ

らんり世の十軒あかのいかにみむ成あれたの一事を

之縁山此宗僧なりあつて誦經念佛一にゆるにを

いくりふに世はかりぬい

あつてに法あふ法のとれそにふり涙のあつちんとい

香語

金色作身微妙土 月晴眼界坐芝容

雜草雲上望無限 紫閣碧椽幾万里

この日に海よきまうて一十部の護念経あひ

四十八万返の称名とりふ廻向して彼の華臺を莊

嚴 棋取ふまれば本願カをりいしてすまかひに

Faint red stamp on the left page.

青政官
内庫

文庫
書

是願也
月下麻

有此辭類曰く法雨の音ありふりひりし

呼鳴

月下麻

掉麻地立地

これ神の山此その月

持衣

尾花のくつ

ふり、里とかれ衣うし

